



町民文芸

只見短歌会

三月詠草

大塚栄一

指導

通院の予約日変へて遠き孫の大学入試の電話ひた待つ

古川 英子

新しき六地蔵尊に何願ふともなく朝ごと手を合はせゆく

五十嵐夏美

参観日に祖母の居ぬ子は綾取りを持ちてひとりが我に寄り来る

目黒 富子

凍る朝子らの吐く息白く見えランドセル音立てバスに乗り込む

馬場 八智

こもりゐて無為なる夕べ部屋出でて冷たき水に大根洗ふ

皆川 恒子

外曾孫は高校入試の合格を知らず受話器に力漲る

吉津 政枝

春雷の鋭き光闇を裂き轟く音は雨を伴ふ

渡部ゆき子

大空に浮かべる淡き昼の月薔薇剪定を忘れて見上ぐ

齊藤ちひろ

雪浅く朝夕凍てし日の続き今年の作付け案ずる人あり

渡部ヨリ子

義妹と義兄の法要無事済ませ灯の下に寄り写経書ききつぐ

新国 洋子

(出詠順)

只見俳句会

四月例会

目黒十一

指導

和菓子屋のガラスケースの桜餅

康 女

病名にふれずに帰る春の雪

笑 羊

春寒や村の本屋のカプチーノ

リウコ

山裾の沢の水音風光る

お彼岸や一と日ひとりの留守居番

都

露味噌や窓を叩いて夜の雨

一 穂

水仙の雪持ち上げし力かな

戦国もみだれとんだか杉花粉

洋 子

一株の春蘭に会う野辺巡り

放たれた言葉のごとくミモザ咲く

敦 子

堰低く飛び交う春の鳶の影

郁 子

さえずりや高き梢の先の先

音もなく山野をおどす春の雪

地には霜空に半月春の暁

キョッキョッキョと食器を洗う春の夕

礼

春の風足元抜ける古着市

一 灯

料峭や文字盤青き置時計

背伸びして立ち去る猫や風光る

又壺歩

春雪の獣の跡は山へ向く

邦 男

立つ鳥もとどまる鳥も名残り雪

春北斗父母遠くなりけり

彼岸入り明日は己の誕生日

水桶のひぎに重たし鳥曇

手すさびに甲のしわ引く春炬燵

春なれや紐締めなおすスニーカー

蔵の町幣舞小僧の彼岸獅子

花粉症知らずに眠る父母の墓

春眠し直江兼継に栞する

邦 男